

長岡市地域の自然災害―江戸時代と一九六一年

二〇一八年の災害

自然災害には火山噴火・地震・雪害・水害などさまざまな災害がある。二〇一八年は、草津白根山噴火、大雪・豪雪、鳥根県西部地震、大阪北部地震、西日本豪雨、台風二一號、北海道胆振東部地震などの自然災害が起り、各地に被害を与えた。被害を受けた家屋の修築をはじめ復興には長い時間がかかる。特に九月六日に起こった北海道胆振東部地震は、冬の訪れによって再建が遠のく。二〇一六年十二月には、糸魚川大規模火災が起きた。この火災は、強い南風によって延焼し大規模火災となった。

噴火・地震・雪・水害・火災は現代になって起こるようになるが、ずっと以前から起きている災害である。長岡市地域を中心に江戸時代の災害の様子、そして二〇世紀の災害の様子をみてみよう。

長岡藩時代の自然災害

越後長岡藩は元和四年（一六一八）から明治三年（一八七〇）までの二五〇年以上、ほぼ同じ地域を支配した。二五〇年以上も同じ地域を支配しているならば、藩史料を活用して長岡藩時代の災害の様子をみるができる。長岡藩の基本史料は「家譜」「附録」「系譜類記」であるが、「附録」に記される長岡藩領の寛文十年（一六七〇）から嘉永五年（一八五二）まで、一八三年間の災害記事をみてみよう。長岡藩領には新潟町（新潟市）も含まれているので、新潟町の災害も含まれる。

第1表は、災害のうち水害・火事・地震・風害に限って件数を掲げたものである。地震は三回あり、一七五一年高田地震、一八二八年三条地震、一八三三年庄内沖地震である。発生頻度をみると、水害が六三回、火事が四六回起きていて、水害・火事は地震よりもはるかに多いことがわかる。長岡藩の「家譜」享保六年（一七二一）七月条には、洪水は七、八月（旧暦の六、七月）に多く、十年に三、五度、多い時は七、八度起ると記されている。このように、長岡藩では江戸時代から水害が多かった。

第2表は災害による死者数一覧である。地震による死者数は四四二人、地震以外の最大の死者数は三一人である。地震はそれ以外の災害による死者数の一四倍以上もあり、桁違いの多さである。

第3表は家屋被害数一覧である。地震による家屋被害数三四五二軒は地震以外の災害による最大家屋被害数の四倍を超える。地震による家屋被害も死者数と同様に、他の災害とは比較にならないほど多い。

長岡藩領では水害が頻繁に起こっていた。地震は一八三年間に三度しか起こっていないが、地震による死者数・家屋倒壊数は、他の災害とは比較にならないほど多いことがわかる。

一九六一年の自然災害

長岡藩史料を活用して、一六七〇年から一八五二年まで一八三年間という長い時間の自然災害の様相をみてきた。ここでは頻繁におこる水害と、めったに起こらないが大被害をもたらす地震という性格の異なる災害があることがわかってきた。この違いを理解して、

防災・減災にそなえなければならぬ。防災という観点から考えると、水害と地震が同時に起こることも考えなければならぬ。しかし、そのようなことが起こるのか。一九六一年、長岡市とその周辺では大雪・地震・豪雨・台風が起き、大きな被害が発生した。一九六一年の自然災害はどのようなものであったのか。長岡市地域を中心に見てみよう。

第1表 越後長岡藩の災害数

番号	種類	件数	内容
1	水害	63	洪水・水損・水冠・水湛・出水
2	火事	46	
3	地震	3	
4	風害	10	大風・風損

典拠)「附録」長岡市立中央図書館所蔵。注) 1. 矢田2015を一部改変。2. 期間は1670年～1852年。3. 江戸・京都の記事は件数に含めていない。

第2表 越後長岡藩の災害死者数

番号	西暦	年号	種類	死者(人)	内容
1	1707	宝永4	長岡洪水	3	溺死
2	1708	宝永5	長岡草生津渡し場	31	溺死
3	1721	享保6	長岡草生津渡し場	21	溺死
4	1731	享保16	長岡洪水	27	溺死
5	1736	元文元	長岡洪水	24	溺死
6	1778	安永7	長岡洪水	2	溺死
7	1781	天明元	長岡洪水	12	溺死
8	1789	寛政元	長岡洪水	4	溺死
9	1816	文化13	長岡城下火事	2	焼死
10	1823	文政6	長岡城下火事	1	焼死
11	1828	文政11	地震	442	

典拠)「附録」長岡市立中央図書館所蔵。注) 矢田2015を一部改変。

第3表 越後長岡藩の災害の家屋被害数

番号	西暦	年号	種類	被害数	被害内容
1	1703	元禄16	長岡大風	10	潰家
2	1707	宝永4	長岡洪水	71	流家19, 潰家52
3	1707	宝永4	風損	36	潰家
4	1731	享保16	長岡洪水	667	郷中流家・潰家共
5	1736	元文元	長岡洪水	203	流家
6	1756	宝暦6	長岡町火事	192	町屋177, 同心屋敷15
7	1771	明和8	大風	24	潰家
8	1778	安永7	長岡洪水	62	潰家
9	1781	天明元	長岡洪水	840	郷中流家・潰家共
10	1816	文化13	長岡城下火事	546	
11	1828	文政11	地震	3,747	潰家
12	1829	文政12	大風	199	潰家

典拠)「附録」長岡市立中央図書館所蔵。注) 矢田2015を一部改変。

まず、新潟県全域の被害をみよう。第4表は各災害における新潟県全域の被害(死者数・全壊家屋数・半壊家屋数)を表にしたものである。一九六〇年十二月から一九六一年一月にかけての豪雪(第4表1)は、三六豪雪と呼ばれる豪雪である。豪雪といえは、一九六三年の三八豪雪のほうがよく知られるが、被害から見れば、三八豪雪は死者一二人、全壊家屋三一世帯、半壊七五世帯で、死者

第4表 1961年新潟県災害被害数

番号	災害区分	月日	死者(人)	全壊	半壊
1	豪雪	12月27日～1月2日	24	28	91
2	長岡地震	2月2日	5	220	465
3	梅雨前線豪雨	6月27日～7月4日	2	8	9
4	8月集中豪雨	8月5日, 8月20日	27	288	666
5	第2室戸台風	9月16日	36	2,822	19,332

出典)『昭和36年 災害の記録』, 新潟県, 1962年。注) 1. 豪雪の12月27日は1960年。2. 梅雨前線豪雨は36.6豪雨とも呼ばれる。3. 全壊、半壊は世帯数。

第5表 1961年長岡市水害・台風被害数

番号	災害名	死者(人)	流失	全壊	半壊	床上浸水
1	梅雨前線豪雨	0	0	0	0	44
2	8.5水害	0	0	0	0	1,060
3	8.20水害	0	1	19	40	3,506
4	第2室戸台風	2	0	136	1,151	-

出典)『長岡市政だより』83-86号, 長岡市, 1961年。注) 1. 梅雨前線豪雨は36.6豪雨と呼ばれた。2. 第2室戸台風の新潟県通過は9月16日。3. 被害数は旧長岡市の範囲の被害。4. 1・2・3の家屋被害数は世帯数、4は戸数。

第6表 1961年8月集中豪雨被害数(8月5日)

番号	地域	死者(人)	流失	全壊	半壊	床上浸水	現地名
1	旧中之島村	0	0	0	12	574	長岡市
2	旧三島町	1	1	24	25	401	長岡市
3	旧与板町	1	2	18	18	278	長岡市
4	旧和島村	1	0	25	19	259	長岡市
5	旧寺泊町	0	0	49	88	-	長岡市

出典)『昭和36年 災害の記録』, 新潟県, 1962年。注) 1の家屋被害数(住家)と2の床上浸水は世帯数。2・3・4・5は戸数。

第7表 1961年第2室戸台風被害数

番号	地域	死者(人)	全壊	半壊	現地名
1	旧中之島村	0	28	238	長岡市
2	旧越路村	1	37	497	長岡市
3	旧三島町	0	72	303	長岡市
4	旧与板町	0	74	548	長岡市
5	旧和島村	0	26	177	長岡市
6	旧寺泊町	0	77	896	長岡市
7	旧山古志村	0	45	61	長岡市

出典)『昭和36年 災害の記録』, 新潟県, 1962年。注) 1の家屋被害数(住家)は世帯数、2・4・7は棟数、5・6は戸数。

数から考えると三六豪雪の被害のほうが大きいです。長岡市の三六豪雪の死者は四人で、三八豪雪では死者はなかったため、長岡市でも三六豪雪のほう被害が大きかった。

一九六一年二月の長岡地震(第4表2)は長岡市川西地区で起こった地震である。第4表の被害数はすべて長岡市川西地区の被害数である。マグニチュードは5.2なのでそれほど大きな地震では

ないが、川西地区は地盤の弱い地域であったため死者五人という被害となった。

地震発生当時の二月は、一月まで降り続いていた雪が二メートルほど残っていたものの、屋根の雪おろしを各家が何度か行っていたので、雪の重みで住家が潰れたということはなかった。しかし、余震を恐れ避難する屋外は雪である。屋外に逃れた人々は、雪の上で

避難生活をしなければならなかった(図版2-15)。

一九六一年の六月・八月・九月は豪雨と台風の被害にあう。第4表の家屋被害をみると、第二室戸台風による被害は大きい。長岡市地域の一九六一年の豪雨・台風被害についてみていこう。

まず旧長岡市地域をみよう。第5表は『長岡市政だより』から一九六一年の長岡市の水害・台風被害数を掲げた表である。死者数、流失・全壊・半壊家屋数と床上浸水した家屋数も掲げた。ここで気が付くのは旧長岡市の場合、八月の集中豪雨は五日よりも二十日の方の被害が大きかったという点である。これは他の地域の被害状況とは異なる。しかし、八月豪雨よりも九月の第二室戸台風の被害の方が大きかった。長岡市内では死者が出ている。

第6表・第7表は旧中之島村ほか後に長岡市に入る地域の被害状況を『昭和36年 災害の記録』から掲げた表である。第6表と第7表を見る限り、旧三島町・旧与板町・旧和島村では死者が出ているのは八月豪雨の方で、死者数だけで考えると八月豪雨の被害が大きいたともいえる。

『昭和36年 災害の記録』には八月豪雨の際の旧中之島村(一九八六年に中之島町)の水害の様子が明瞭に記載されている。旧中之島村の五百刈地内の堤が切れ、村内は泥水の湖と化した。村は周囲を堤防に囲まれていて、約一昼夜にわたって流入した泥水と降雨のため浸水家屋が続出し、常備排水機での排水は効果がなく、刈谷田川の水位低下を待って下流堤防の払切りを四か所実施し、八月十四日になってようやく排水ができた。この中之島町は二〇〇四年七月の新潟・福島豪雨(七・一三水害)で再び洪水に見舞われ、

三人の方が亡くなっている。

複合する災害

地震・雪・水害などの災害はそれぞれ個別に起こることもあるが、複合して起こる場合がある。地震はいつ、どこでも起こることを考えておかなければならない。一九六一年二月の長岡地震の時には雪がまだ二メートルほど残っていた。日本海側の防災対策は冬に地震が起こる場合を想定して、積雪時の避難方法・避難所とその運営方法等を事前に考えておかなければならない。豪雨の場合も次々に豪雨が同じ地域を襲うことも想定しておかなければならないだろう。一九六一年には六月に梅雨前線豪雨の被害を受け、八月には集中豪雨の被害を受け、九月に第二室戸台風による被害を受けている。

災害は複合して起こる場合がある。一九六一年の長岡市地域はまさに複合する自然災害によって被害を受けた事例である。災害は複合して起こることを前提に防災・減災の対策を立てておかなければならない。

〔参考文献〕「平成一六年七月新潟・福島豪雨による被害状況(第五三報)」消防庁、二〇〇四年。『長岡市政だより』八三〜八六号、長岡市、一九六一年。長岡防災HP災害の記録、長岡市危機管理防災本部(二〇一八年一二月)。新潟県消防課『昭和36年 災害の記録』新潟県、一九六二年。矢田俊文「自然災害の発生頻度と被害規模―越後長岡藩領を事例として―」『災害・復興と資料』六号、新潟大学災害・復興科学研究所危機管理・災害復興分野、二〇一五年。

(矢田)